

ゆうかり放送委員会提供

ゆうかりに乾杯

第 144 回放送の概要 (2019 年 4 月 27 日放送)

パーソナリティ
たろう
(佃 由晃)
なか
(中嶋邦弘)
かりん
(妹尾優香)
くらら
(河野真紀)



ミキサー
門ちゃん
(門田成延)

会計
小山俊則

相談役
わだかん
(和田幹司)

1. ゲストコーナー (1) 特定非営利活動法人 Oneself 理事長 中野みゆきさん

中野さんは、東舞子小学校、歌敷山中学、神戸高塚高校、大阪芸大短大部、帝塚山学院大学3年次に編入学。大学では雑誌作りや記事を書くゼミに入り広告関係の勉強をした。ライターになりたいと思い編集の勉強もした。就職は靴を作る会社(本社は岩岡)で、卸販売部に配属され、営業が販売した靴の入力をしてきた(営業事務)。

会社では中国語が出来ると社内異動がしやすいため、退社後中国語の勉強をした。そこでは中国人留学生に日本語を教え、中国人からは中国語を学ぶ相互学習を始めた。その時初めて日本語を教える難しさを知り、中国語を教える先生から日本語を教える資格があることを聞いた。日本語教育に興味を持ち、三宮の養成学校に行き、終了前に会社を辞めた。

中国人に日本語を教える内容は、文法、漢字、語彙、リスニング、読解、会話、作文がある。漢字は大体同じであるが簡体字のため、中国人の書く漢字は日本にはなく、日本人の書く漢字は中国にはない。また同じ漢字でも意味が全く違うなどお互いの勘違いが起きる。中国人は簡体字を書き、繁体字は台湾や香港の人が書く。しかし台湾から来た人も繁体字ではなく簡体字を間違っている。日本語の「骨」は中国では「骨」で少し違う。日本語教師の資格取得は日本語教育能力検定試験を受けるか、養成学校で決められた420時間を最後まで履修するか、又は大学で専攻している人は取得できる。中野さんは養成学校の決められた時間をすべて終了して資格を取得した。

その後上海から車で2時間の江蘇省南通市南通職業大学に1年間赴任した。日本語を学ぶ学生は1学年100人くらいで3学年あるので300人。会話と作文の授業担当はネイティブが行う。中国人の先生

は文法、語彙などを担当。学生は日本のアニメをよく見ているので、日本に対する興味が非常に強い。コナンやワンピースは良く知られている。



日本語学科の学生（右端は中野さん）



日本語学科の学生

仕事上はあまり苦労はなかったが、中国語があまりわからなかったので大学を1歩出ると生活が大変だった。しゃべりが早すぎたり方言が入るので聞き取りが難しかった。指で示す数字のジェスチャーが日本とは違うので、買い物で聞き取れない時にジェスチャーで示されたが理解できなかった。学校からの給料は4,000元（6万円）であった。住居は大学学生寮の奥の教師寮に住んだ。アメリカやドイツなどからも先生がきており共通語は英語だった。アクシデントは到着したその日に寮のブレーカーが突然落ちて真っ暗な中で朝まで過ごした。管理人から部屋のスイッチしか入れてないのに、あなたが使ったからと言われた。

現地の日本企業と学生との交流のため毎週1回草野球大会をした。前任の先生が日本企業との交流には野球を知っているといいよと教えていたので、野球のルールは知っている学生は多い。現地中国人の日本に対する態度は、もう少し内陸部の地域ではジャスコなど日系の店のガラスが割られたことは聞いたが、南通市は滞在中怖いと思うようなことはなかった。書道については、よく利用した飲茶の店で、注文を漢字で書いて見せると、店長から漢字が上手と言われ、飲茶を作らず筆を持ってきて自分の書を見せてくれた。

小学生の時に父親がシンガポールに単身赴任していたので、その時に初めて春休みに海外に行き、その後も家族で韓国他いろんなところに行った。海外での生活に困ったという記憶があり、帰国すると日本在住の外国人も生活に困っていることがあるだろうと反対の気持ちが芽生えていた。それが今のOneselfの活動につながっている。

2. ミュージック:たかとり救援基地復興隊 「夢光る町神戸を」

3. ゲストコーナー (2)

中国赴任生活が終わって2011年の6月に帰国し、仕事を探すためにハローワークに行った。市内で生活をしている外国人向けにテキストを作る仕事を見つけ、面接を受けにNPO神戸定住外国人支援センタ

ーに行った。仕事内容は、テキストを作り、それを学習者が使用し、その効果を測るモデルの教室もあった。その時中国残留邦人の教室を担当した。そこで再び中国語に触れる機会があった。2年間働いた後、自分でNPO Oneselfを作った。法人化1年前より任意団体で活動を始め、2014年4月法人化した。

定住外国人支援センターで働いている時に特に中国残留邦人について思ったことは、今は健康で出かけるのに苦労はないが、いづれ自分の住んでいる地域に居場所がないと出かけるのが大変になると思った。そのためには居住地域に居場所を作りたいと思ってNPOを作った。設立当初は明舞団地の中に日本語教室を作る方針で場所を探し、学習者を集めた。中国からの帰国者は明舞団地が非常に多いことを知っていたので団地の中で活動した。この団地で外国にルーツを持つ人は残留邦人が非常に多い。日本語教室には団地内で探したボランティアが参加している。日本語ボランティア養成講座を団地内で開催した。三宮で開催すると30人くらい集まるが、明舞は10人くらい、しかし養成講座が終わった後明舞で活動してもらうニーズが高く、同じ地域に住む人が支えるという関係性を作りたかったので講座は明舞で開催した。このようにすることでボランティアが日常生活に係る情報を、日本語を学ぶ中国残留邦人に提供、交換できることになる。教室の人数を集めるのが目的なら三宮などが良いが、居住地域に居場所を作りたいと思っていたので最初は一人で大変だった。

日本語教室だけでなく明舞の支援団体の協力を得て、書道、手芸を教えてもらったり、帰国者は水餃子の作り方を地域住民に教えるなど定期的な交流を行った。Oneselfの活動拠点は、明舞の他新開地に**国際交流シェアハウスやどかり**を2015年7月より運営している。この場所は日本語教室の他、留学生向けのシェアハウスがあり学生支援の意味合いが強い。

明舞の中国残留日本人と接すると、授業の最初は「私は〇〇です」という自己紹介から始まり、国籍を説明する文法を練習する。自分が日本人か中国人かよくわからないと言って練習がストップすることがある。文型は問題ないが、そこで言う言葉の思いは複雑であることを初めて知った時、そのようなこともわからず支援していたことを恥ずかしく思った。受講者からはここに教室を作ってくれてありがとうという温かい気持ちで接してくれることがありがたいと思って活動を続けている。明舞で中国人と結婚している配偶者の方、夜間中学で友達になったバングラデシュの方、今は帰国者だけでなく色々な背景を持った方が教室に来られているので雰囲気少し変わってきている。

日本語学校で非常勤で働いていた時、留学生と会話の練習を兼ねてどんな家に住んでいますかと聞くと、窓がないという答えが返ってきた。引っ越ししたいが不動産屋に行って家を借りるのが難しく、借りられなかったなどを聞いて住居に対するサポートがもっと必要と思った。また学校とアルバイトを往復するだけの学生が多く、月曜日に授業が始まり土、日のことを聞くと寝ていたという学生が多かった。学校、バイトだけでなく地域住民と交流する機会を作れば、日本語を勉強するモチベーションが向上すると思った。



国際交流シェアハウスやどかり

やどかりの特徴は、日本人の管理人が常駐していること、留学生から見てお父さん、お母さん呼べる世代のスタッフがいること、学生寮であるが旅館業の許可もとっているため、親が遊びに来た時に同じ場所に宿泊できる。他国に旅行するのは簡単でない学生もいるので、来日している人が宿泊してもらえば交流もできると考えた。シェアハウスとゲストハウスを兼ねている。また地域の方がシェアハウスを訪問するのを歓迎している。地域住民にやどかりの理解を得るのは最初は大変だった。外国人だけが急に住むのではなく日本人が常駐すること、最初にスタッフが近隣の住民と顔見知りになり、地域のクリーン作戦に参加するなど近所付き合いが出来るよう取り組んだ。やどかりの裏に民政委員が住まっていたのでよく相談に行き、地域の方が参加できるやどかりのイベントの住民への広報などをお願いすると、自治会長に伝えてくれた。地域からの苦情は少なくなったが、学生は入れ替わると大声を出したり、自転車に乗る練習をやどかりの前ですりすりすることを指摘されることがある。学生は声が出る概念は日本人とは違う。夜だから静かにしなさいと言っても静かにするレベルが異なるので、学生を連れて夜ツアーをし、静かさを体験してもらった。

地域と学生の交流は、自由に出入りしてもらっていいことを理解してもらうため、年1回やどかりがオープンした7月に「やどかり夏まつり」を開催し、スーパーボールすくいなど子どもたちにも参加してもらえるようにしている。夏まつりをきっかけに他の交流会にも参加してもらっている。交流会の一つとして取り組んでいる**防災運動会**は、留学生と同世代の高校生、大学生にも参加してもらい、同世代交流を兼ねた防災訓練である。日本語学校で地震について話しても、地震時はエレベーターで逃げると言うなど防災意識のない学生がいる。留学生に関心を持ってもらうため、楽しみながら防災を学べるイベントを作ることとし、知らない人と一緒に力を合わせて何かが出来る運動会の種目も取り入れた。留学生と同世代の日本人が防災に真剣に考えていることに気づいてもらい、また防災運動会の運営ボランティアに地域住民に入ってもらうことで、地震時に情報がとれないかもしれない住民が近くに住んでいることを知ってもらいたいと思っている。運営ボランティアは中高年をお願いしている。



防災運動会

2回目までの防災運動会は、留学生向けに内容を自分たちで決めて、当日ボランティアに話して実施していた。3回目に同じ内容で実施したところ、外国人の家族参加が増え、日本人のお父さんが、地震発生時自分が傍にいない時、外国人の妻が子どもを守れるか不安で参加したと言われた。それまでは学生向けイベントで、持って逃げるものに粉ミルクが入っていない、おむつに代用できるものが情報として入っていなかった。内容を抜本的に見直すこととして防災企画会議を開催した。会議には子育て世代のお母さんにも中に入ってもらい、どういうブースが必要かを話し合い、分かれてブースを企画するところから手伝

ってもらった結果、内容は大きく変わった。防災運動会の開催場所は湊川公園、荒田公園など近隣の公園。

雇用自立支援事業は、日本語が上手に話せずアルバイトが見つげにくい学生に、シェアハウスの清掃をアルバイトとしてやってもらいながら、スタッフと日本語を話す練習をしてもらっている。ある程度話せるようになると外の店の面接を受けてもらっている。今は仕事はあるが工場や夜勤帯など話さなくても済む仕事が多い。会話をしながらできる仕事を提供出来ればと思っている。

明舞祭 2017 は、明舞には他団体のものを含め音楽イベントだけでも年に2~3あり、その他いろいろなイベントがあったので、それをまとめて大きいお祭りにしよう企画会議が出来た。そこに Oneself も参加し、料理、ダンス、展示など色んなカテゴリーがあり、とりあえずダンスのカテゴリーにしようとしたとき、地域住民から折角帰国者がいるので水餃子の販売をしてほしい、チャイナドレス着てほしいと提案され、自分たちの活動が地域に根付いていることを感じた。このイベントで交流範囲が広がった。明舞団地に関与する団体は、他には習い事をしている団体、大きいイベント時に入ってくる団体、大学などもあり数は多い。



たこ焼き体験



国際交流ピクニック



習字体験



折り紙体験

クラウさんはガールスカウトの活動場所として、利用していた地域の集会所が使えなくなったので、子どもの騒がしい声を許容してくれる場所として、貸しスペースも提供しているやどかりを使用させてもらっている。子どもたちには、自分とは違う外国人とすれ違うだけでも、地域にはそのような人が沢山住んでいることわかるだけでもいい経験になる。今年2月兵庫駅南公園で行われたこどもフェスタにベトナム留学生が初参加し、日本人に話しかける最初の言葉が「ちょっとすみません」と習っているので、言われた日本人の子供は距離感を感じ、留学生は子供が早口で理解できなかった。こどもフェスタに参加していた兵庫図書館がカモメカモメ、おしくらまんじゅうなどの遊びを提供してくれると、留学生と日本人の子供はすぐにうちとけていた。



兵庫駅南公園こどもフェスタでの留学生と日本人こどもたちの交流

4. 地域瓦版

- 第15回花水木まつりが4月29日（月）、10時～16時、長田神社境内と周辺で開催。お楽しみ企画として目指せ！金メダル1花水木オリンピックとして小学生以下対象の楽しいイベントがあります。
- 恒例の第49回神戸まつりが5月18日（土）、19日（日）に開催されます。今年のテーマは「ビバ！神戸 この街が好き！」
- 須磨ビーチ潮干狩りが4月27日（土）～6月2日（日）一海はいつも思い出の原点だー

放送音声は、FMYのHPおよび「ゆかりに乾杯」のHPで視聴いただけます。

<https://tcc117.jp/fmy/?cat=51>

<http://yukari-ni-kanpai.sakura.ne.jp/>